「空間連続体」の分節に関する研究

都市の魅力とは一体なにか？

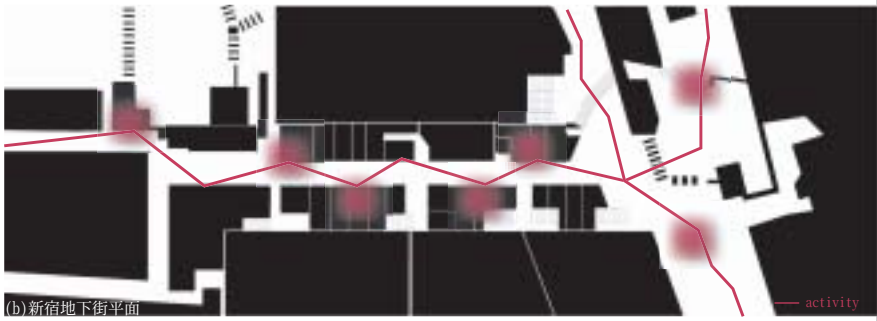
都市というとらえどころのない漠然とした存在の中でひときわ魅力的に映る場所がある。それは都市の中の 「道」である。道には扉もなければ、歩みを妨げる壁も存在しない。その連続した空間に対して様々な機能が面し、含まれることによって、道を行き来する人々はその都市の中の様々な機能に引き寄せられて、ふらりふらりと色々な方向に歩いていく。そしてその人々が起こす行為が、その周りの他の人々にも少なからず影響を与えている。(a)

連続した空間に多種多様な用途や機能が含まれると、そこで行われる行為が相互に影響を及ぼしあい、様々なアクティビティを発生させる要因になると考える。(b)
そのような都市的な状況を建築空間に取り込むことで、空間、機能行為に新たな関係性を作り出すことが出来るのではないだろうか。

では、そのような都市的な状況を建築にどのように取り込めばよいのか。私は建築空間にみられる連続した空間に注目しようと考えた。その連続した空間に様々な機能を内包することが出来れば、都市的な状況を建築空間の内部に作り出すことが出来るだろう。

本研究では物理的に壁や扉で仕切られていないひとつながりの空間を「空間連続体」と定義し、その空間がもつ特性、設計手法を抽出し、プロジェクトに応用することを試みる。

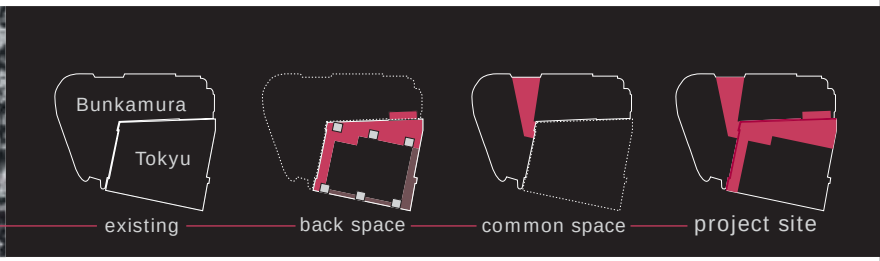
(a)新宿地下街の様子



(b)新宿地下街平面

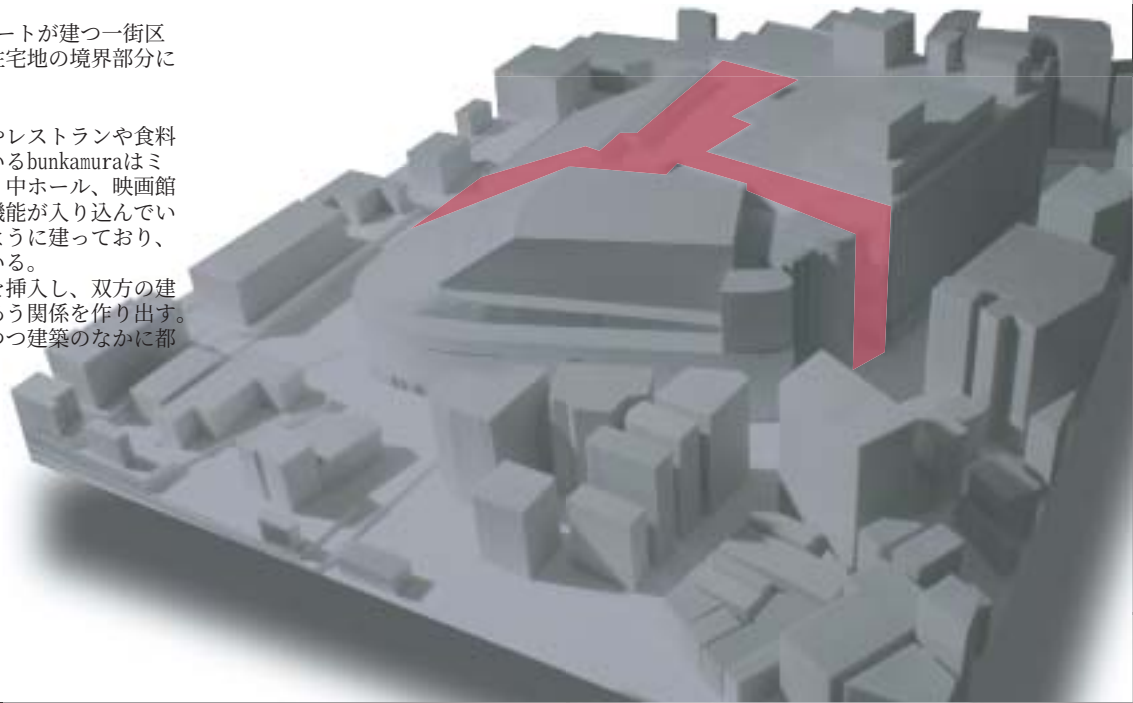
東急×bunkamura建て替え計画

空間連続体を既存建築物の状況から抽出し設計を試みる



敷地は渋谷にあるbunkamuraと東急デパートが建つ一街区である。駅からの商業施設の連なりと住宅地の境界部分に面している。

東急デパートには大小さまざまな店舗やレストランや食料品売り場が入っている。それに面しているbunkamuraはミュージアム、音楽スタジオ、大ホール、中ホール、映画館などが入っている。このように様々な機能が入り込んでいるにもかかわらず、両者は背を向けるように建っており、一部分のみの通路によって連結されている。
そこで、建物の境界部分に空間連続体を挿入し、双方の建物の機能が混ざり合い、影響を及ぼしあう関係を作り出す。既存のポテンシャルを最大限に活かしつつ建築のなかに都市的な状況を創出させる。



「空間連続体」

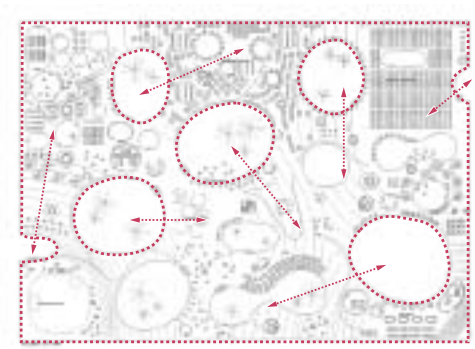
空間連続体の設計手法を探るべく、建築空間における空間連続体を抽出し分析していく

空間連続体の内部に複数の機能が含まれているもの

公共施設における連続しうる機能はカフェ、レストラン、ギャラリー、図書館、オフィス、ホール、運動場、会議スペース、ショップなどがあげられた。さらに極論を言うとトイレやバックヤード以外の機能は基本的に全てつながりあう可能性がある。

そのような機能が混ざり合う空間で、かつ大人数が同時に利用する場合に、重要になってくる部分は空間連続体の境界面であるといえる。空間連続体の内部でおこる行為を内部だけで完結してしまうのではなく、隣接している空間にも影響を与えるように工夫することが重要である。

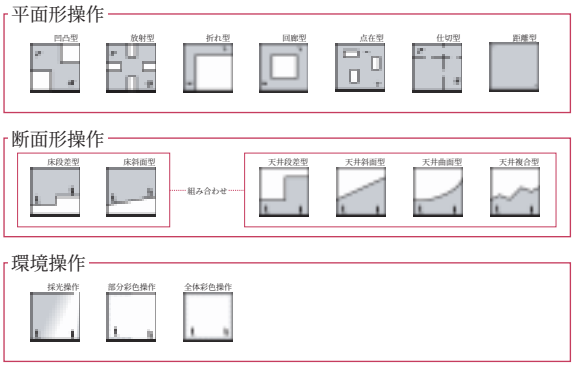
安中環境アートフォーラム



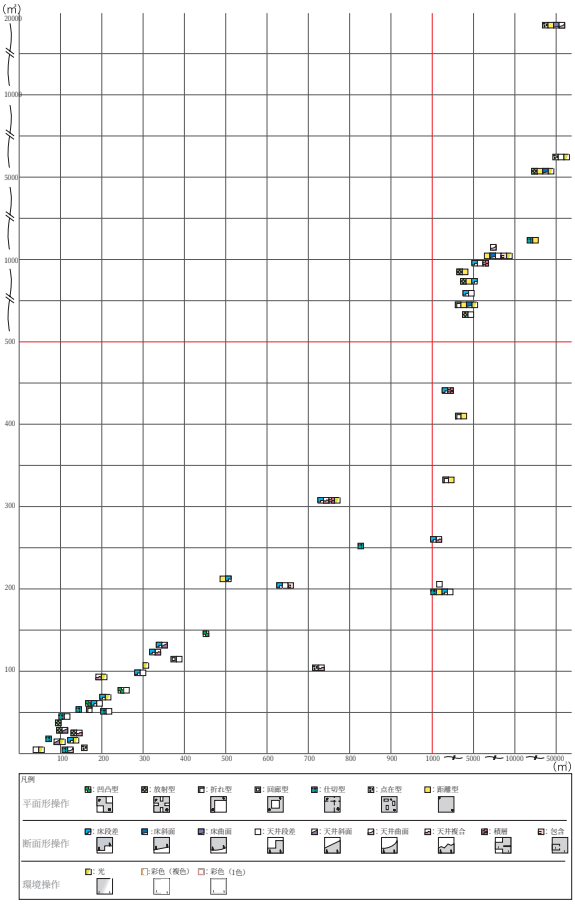
EPLF ラーニングセンター

空間連続体の分節手法

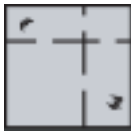
ひとつながりの空間でありながら、同時に個々の領域をつくりだすための手法を抽出し それらを空間に施される平面形操作と断面形操作、環境操作の３つの項目に分類し、分節手法の類型を示す。



これらの手法には空間のスケールに密接に関係する手法と、一方でスケールに全く関係ない手法が見られた。このグラフは床面積と体積と手法の関係性を表すものである。
空間のスケールに応じた手法を選択して設計を行う。



仕切型



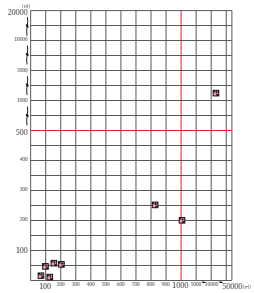
空間を間仕切りを用いて分節したもの。この分節の場合仕切りにどのような開口部をとるかということが主題になってくる。小さな空間をさらに仕切り、効果的に開口部をとることでこちら側と向こう側をつくり出し、空間に奥行きを与えている。主に住宅等の小さなスケールの空間に多く用いられている。

梅林の家

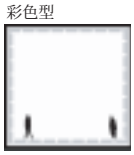
木挽町御殿Project 6F

上越市ショールーム

ラププラネット展会場構成



彩色型



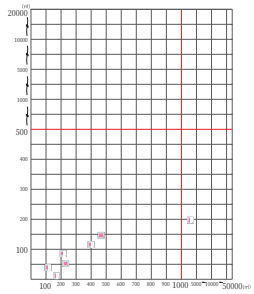
空間連続体の内部に彩色することで空間を緩やかに分節している。主に小さな空間にみられた手法である。一つの色に包まれることでその色が面している隣の部屋を通常よりも意識的に感じられ、空間に奥行きを与える要因になっている。

昭島のハウス

ヨーガンレール丸の内

ジューシーハウス

高橋内科クリニック



距離型

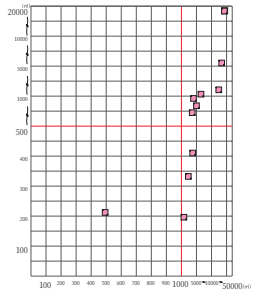
物理的な距離によって個々の領域をつくりだしている。平面的な広がりが必要な手法であるといえる。向こうに見えている空間は繋がってはいるが場所（機能・行為）としては全く異なる性質を持つことが可能である。

金沢21世紀美術館

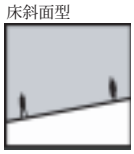
風の輪

ところミュージアム大三島

ラププラネット展会場構成



床斜面型



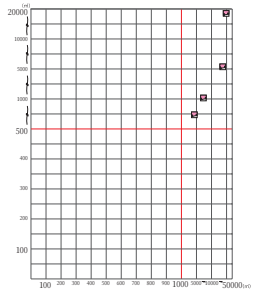
床が傾斜しているため空間と空間を繋ぐ部分に用いられることが多い。そのため移動しながらも体験できる機能(ギャラリー等)が含まれる。しかし平面に十分な広がりがある場合は、原っぱのような環境を建築に取り込むことが出来る。

EPLFラーニングセンター

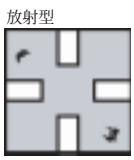
Fujiyama Museum

安中環境アートフォーラム

館林美術館



放射型



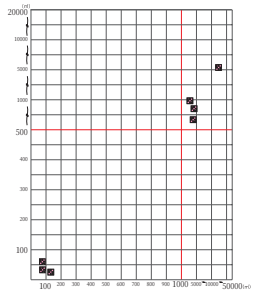
壁を放射型に配置することで、空間に中心と周辺をつくりだしている。中心に立つと様々な場所が見え、空間を広く感じることができる。一方周辺は視線が限定され個の領域性が強くなる。この手法は単体で完結するもの(小空間)と連続したもの(大空間)の二つのタイプが見られた。連続するものは自分の居場所が中心になるため中心と周辺の関係が居場所によって入れ替わっていく。

T HOUSE

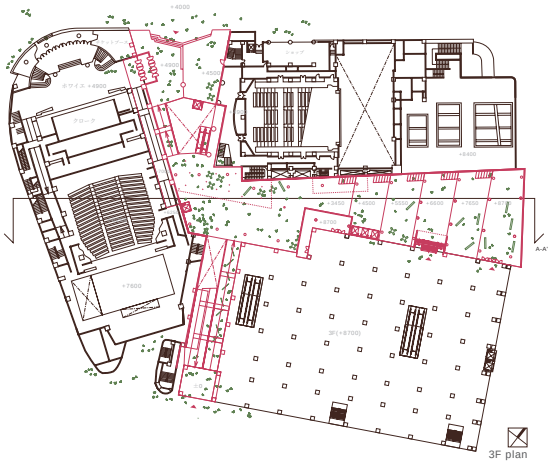
軽井沢の別荘

しじま山荘

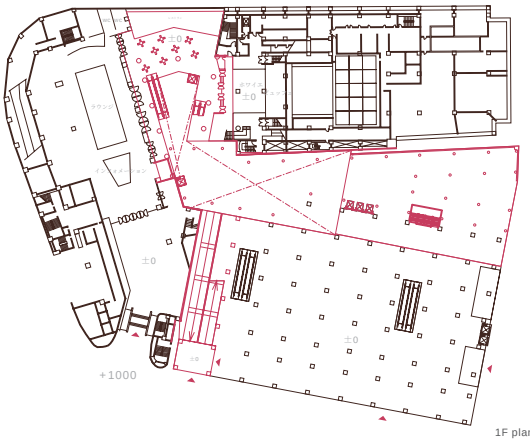
鬼石多目的ホール



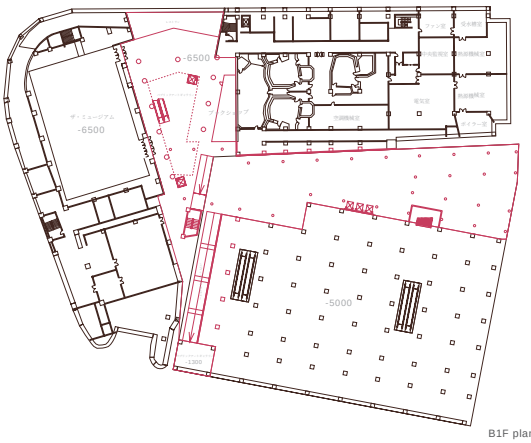
都市的な状況を建築に取り込むために、建築空間にみられる連続した空間に注目し、境界面の重要性と分節手法を抽出した。それらの分析をふまえ、連続した空間に様々な機能を内包することが出来れば、都市的な状況を建築空間の内部に作り出すことが出来るだろう。



3F plan



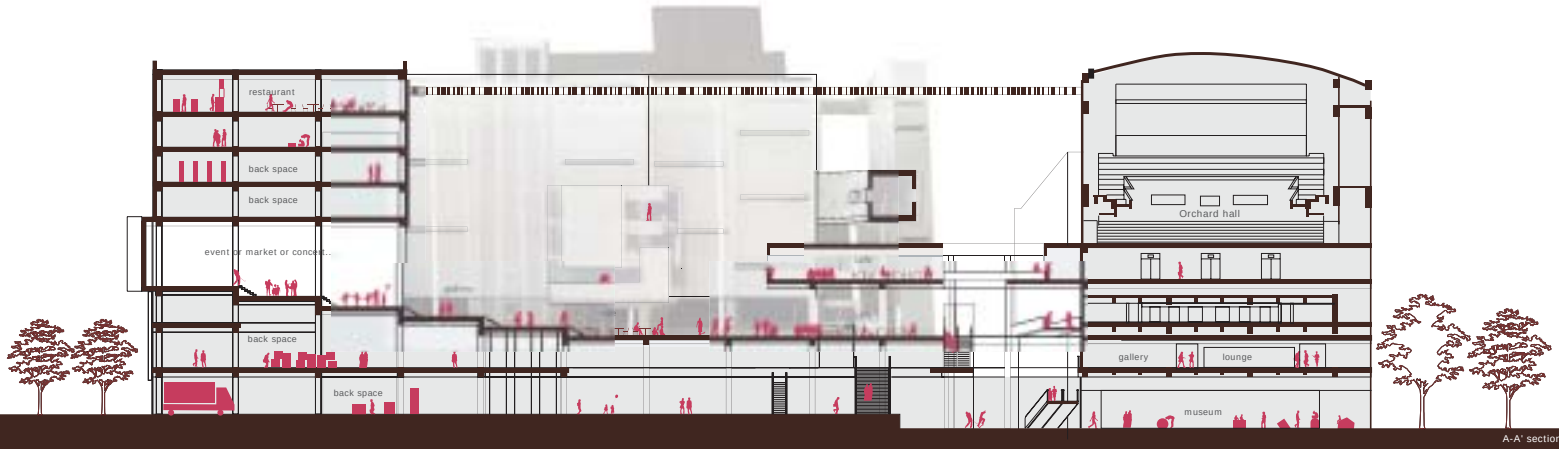
1F plan



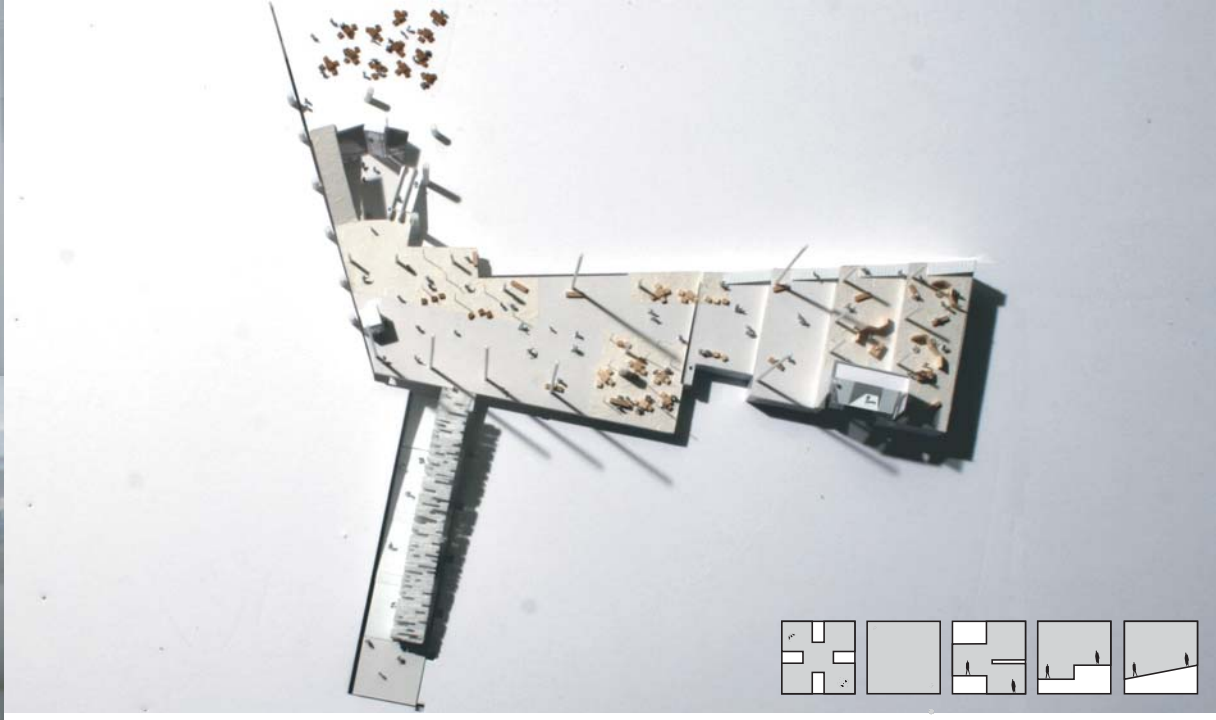
B1F plan

Shibuya Tokyu / / Bunkamura

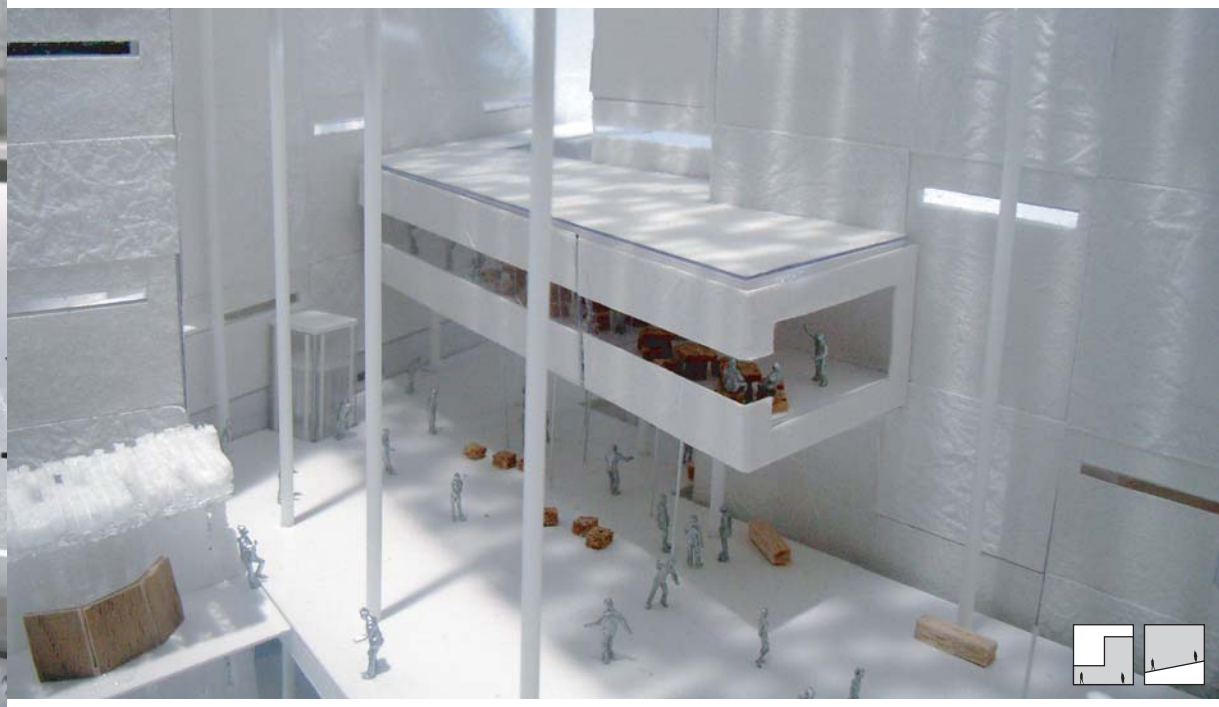
境界部分を一つの空間連続体と考え、段階的に空間の大きさに応じた分節を行うことで、大きな空間と小さな空間が共存する空間をつくりだす。
それは、都市的な状況を内包する器になるだろう。



A-A' section



境界部分の形状が放射型になっていることがこのプロジェクトを特徴づけている。隣接する建物へのエントランスレベルを緩やかに繋ぎ、放射型の平面形の端部に隣接している空間から機能を滲み出させる。それらの機能が中央の広場を介して緩やかに連続する。広場には中心性が生まれ、端部には個々の領域性が生まれる。



空間連続体に隣接する空間から機能のボリュームを飛び出させ、天井高の低い空間を創出している。また、隣接する空間と空間連続体は視線が繋がることで相互に影響しあう関係性を生み出している。また、さらにその飛び出したボリュームによって天井高が低くなった空間を分節し、よりヒューマンスケールに近い空間を創出させている。